
瞬間。 - setsuna -

U-suke

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

瞬間。 - s e t s u n a -

【Nコード】

N 6 1 9 3 I

【作者名】

U - s u k e

【あらすじ】

『初恋は実のらない・・・。』

この言葉を信じていた侑夢。

侑夢は、初恋を体験し、大好きなサッカーと恋愛を通してある女の子を大好きになってしまう・・・

そして、その先に待つものとは・・・

? - e i n s -

11年前。

お前の夢は何だ？

んゝと・・・。

「僕、サッカーの日本代表になる！そして、テレビでサッカーしてるところをお父さんとお母さんに見てもらうんだ！」

「そっか、たのむぞ。」

「うん！」

あの時、父親に聞かれた言葉。

その頃の俺は、輝いていた。

- - - - -

10年後。

「あのさ、お前の夢って何？」

「えゝいきなり何？」

「いいから聞いてんだよ。何だよ。」

「ゆーくんは？」

「えゝ？…けっ…こん…するこ…と？」

「えっ？何？全然聞こえないんだけど。」

「もゝ。」

「だーかーらー…結婚することだって！」

「えっ、えゝ？えっ？だって、……………ゆーくん？」

「何？」

「・・・大好き。」

「・・・ありがとう。」

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

僕たちは、

小学校入学式のために初めて出逢った。

それが、僕たちのすべての始まりだった。

その出会いが運命という名の道の始まりだとも知らずに・・・。

俺の名前は、大和^{やまと} 侑夢^{ゆうむ}。

星座は、おひつじ座。

血液型は、A B型。

外見はいかにも、

体育会系。

だから、勉強は全くダメ。

好きなスポーツはサッカー。

趣味は、散歩。

初恋は、

・・・小学校5年生の時。

その人と出逢ってから4年・・・小学校5年生のときのことだった。

「おい、侑夢！」

「なんだよ、力也かよっ！」

こいつは力也。

小学校の時はクラスが全部、一緒だった友達。

「なに？」

「ドッジじゃない？」

「ごめん、今からサッカーなんだ。」

「えっ、マジかよ。じゃあ、またな。」

この会話をこいつとは何回しただろう。

僕は、この小学校6年間ずっと、

学校の日も、休みの日もサッカーの練習をしに、地元のチームに通っている。

だから、あまり学校の友達と一緒に遊ぶことができない。

でも、サッカーが好きだから一度もめげずに続けられた。

けど・・・

一度だけ練習をサボったことがある、

それは、学校が終わって放課後のことだった。

放課後、力也に毎度、同じように遊びに誘われた。

「侑夢、今から遊ばない？」

「だから、俺は今からサッカーだって。」
「いい加減・・・」

「違うんだって、今日はいつもとち・が・う・ん・だ!」

「何が?」

「なんと今日は女子と一緒に遊ぶんだよ。」

「えっ、まじ?」

「誰と?」

「杉田とか?」

杉田さんは、俺が好みの女の子。
でも、好きという感情はもてなかった。

「ぶっ、お前」…。

「で、どうすんだ?」

「お前、俺が杉田のこと気になってること知ってて。…ま」…今日
ただだかな?」

「だと思っただぜ。」

「で、他は?」

「男子は、俺とお前と、ヤマ、川島。」

「マサは？」

「今日は帰るって。」

「そっか。女子は？」

「杉田と永野と佐藤……それと、咲山。」

「えゝ。咲山？」

「あいつ、めっちゃ暴力的で男みたいじゃん！」

そいつは、咲山さやま 侑ゆう。

こいつはいつも俺をチビチビって言うてバカにする。
だから嫌いだ。

それに、俺と同じ漢字が名前に入ってるからでもっと嫌だ。

「だって、しょうがないじゃん。」

「まっ……杉田いるなら……いつか。」

「で、何すんの？」

「……王様ゲーム！」

「え……。」

ということだ、

放課後、みんなそろって王様ゲームが始まった。

……

……

……。

全然王様になれずに……思うと俺は罰ゲームばっか受けてた。

しかし、

ついに、その時がきた……

みんながそろそろ帰ろうと思い、

最後のゲームの回だった、

その引いた割り箸には……

「王様」の文字が……。

「やっつったー！」

「えっ」

「最後に侑夢かよ」

「そういうこと言わないのっ（笑）」

「で、侑夢の命令は？」

「じゃあ・・・」

「・・・王様と4番の人はゲームが終わってから、二人でデート！」

「はあ？何だよその命令！」

「いいだろ？王様の命令は絶対なんだから！」

「男だったらどうすんのよ？」

「俺は信じてる！」

「はい、はい。」

「侑夢は相変わらずバカだな。」

「バカって言うなよ。」

「だって、その命令がバカらしいんだもん！」

「あははははっ」

みんなが笑う。

でも、これは杉田さんと一緒になれる最大のチャンス！

「じゃ、4番の人誰？」

「・・・。」

「誰だよ。」

「誰？侑夢とデートするの嫌なのは分かるけど、早く出よーぜ？」

「おいっ。どっいっことだよ。」

「あははっ。」「めん。」

「で？誰？」

「・・・あたし。」

「えっ？」

その声は杉田さんではなかった。

その声は・・・

「だから、あたしだって。」

咲山の声だった。

「え〜〜〜〜！咲山？よかつたな侑夢、一応女の子じゃん。」

「いつ、一応つてなによ！」

「えっ、だ、だって、さっき侑夢が咲山は男みたいで、暴力的だって。」

「おいつ、お前、バ、バカ。」

「・・・侑夢？、それ本当？」

咲山は、こっちを鋭い目で見ている。

「あ、あの、い、いや…」

「ほ、本当ってかさ、さ、咲山は女だよな？なっ？」

「うん。」

他の男子もまぎぞいをくらって、あわてて答えた。

「あっ、そう。」

「うん。そうだよ。」

と、空気がしばらく凍りつき……

力也がいきなり、

「じゃ、じゃあ、早くデート行つてきな。」

「う、うん。そうしなよ。」

男子も女子もいきなり手を組んだかのように、

俺ら、二人を押してくる。

「ちょ、ちょっと。待つてよ。」

「侑夢、・・・行つて来い。」

「わ、分かったよ。……お、お前ら覚えとけよ?」

と、男子に告げて咲山との罰ゲームデートに向かった。

んなところで、デート開始。

・・・出発した瞬間から、なぜか俺は緊張していた。

それもそうだ、

あんなことを言って、そのあとデートだなんてふざけてる。

けど・・・

なんでだろう、

なんか異様な違和感があった。

それは・・・

隣にいる咲山が異様に楽しそうだったからだ。

あんなこと言ったのに。

「ねえ？侑夢？」

「な、なんだよ。」

「どこ行く？」

「どこでもいいよ。咲山は？」

「ええ。じゃあ、公園行こっ？」

「う、うん。行くか。」

「うん。早く行こっ！」

咲山は俺の前で、俺が照れてしまっくらの笑顔で微笑んで・・・俺を見つめた。

照れてしまった。

・ ・ ・ 俺が咲山の笑顔で。

なぜだかは自分でもわかってる。

なぜなら、

その時、俺は恋をしてしまった。

初恋だ。

けど、

そのあとのデートのことは、まったく覚えていない。

そして時は流れ・・・

俺たちは小学校を卒業を迎え、

みんな地元の桐川中学校に入学した。

？ - z w e i -

「・・・・・・・・。。。」

「・・・・・・・・。。。」

「起立！」

「これから、第〇〇回、入学式を開式します。」

「礼・・・・・・・・。」

新たな13回目の春がやってきた。

しかし、今年の春は今までの春とは・・・・違う春になった。

なぜなら、今年は中学校入学の春。

俺は、恥ずかしながらこの中学校生活を楽しみにしていた。

中学校には、「部活」、「文化祭」、「体育祭」、「修学旅行」、それと・・・「恋愛」。

俺は、今までこの12年間、「恋愛」というものを経験したことがなかった。

だから・・・

俺にとって、とても楽しい中学生ライフだった。

「礼。・・・着席。」

入学式が終わった。

このあと、クラス発表がある。

発表を見に行こうとした時、

「おい、侑夢！」

「あ？・・・おつ、綾部！」

こいつは、綾部あやべ たつや龍弥。

小学校は違うが、同じサッカーチームだった友達。

「どうした？」

「お前、俺と一緒に1年2組だつてよ」

「マジ？やったじゃん！」

「じゃあ、一緒にクラス行こうぜ」

「あつ、うん！」

実は、

この学校、俺がいた小学校の他に、

もう一つの小学校と合併することになっている。

俺らが2人で歩いていると、

向こうから、

2人組が・・・

「よっ！侑夢！綾部！」

「おう！姫世と京伍かつ！」

この2人は、同じく元チームメイトの

姫世きせ あおい 葵と、

須藤すどう きょうじ 京伍。

2人とも、1年1組。

「お前ら何組？」

「俺らは2組だよ」

「そっか、じゃあ隣だな」

「まじ？じゃあ、あとでクラス行くよ」

「うん！」

「じゃ、また後でな」

「おう！またな！」

で、他の元チームメイトは・・・と。

1年1組 芝山流。
はし せやま りゅう

1年2組 小川 信也 川野聖夜
かわの せいや

1年3組 鈴木 将 佐野 亮太

(これで全員か・・・。)

「相変わらず、すくねるな」

・・・綾部が口ずさんだ。

「それ言うなって!」

「だって、9人じゃサッカーできないんだかな?」

「そりゃ、そうだけど・・・」

(こりゃ、部員集めからか・・・。)

そんなこんなで、新学期がスタートした。

勉強のことなんて考えずに、

いつもサッカーのことばかり考えていた。

しかし、気になっていることは他にもあった。

「・・・あいつは、3組か。」

そして、

あっという間に1カ月が過ぎ、

部活動集会が行われた。

「えっと・・・サッカー部は・・・。」

「サッカー部の1年生は体育館の一番右端に集まってー！」

と、声が聞こえた。

見た感じサッカー部は他の部活よりは、多い感じだった。

さっきの声はサッカー部の先輩の声だった。

見てみると、入学して自分が恐いと思った人たちのほとんどが、サッカー部の3年生にいた。

そう思うと、2年生と思われる人たちは優しそうだった。

けど、先輩の中には知っている人もたくさんいた。

なぜなら、小学校のサッカーチームで一緒だったからだ。

「・・・よゝ、やっぱり侑夢じゃんかゝ。久しぶりゝ」

「ひ、久しぶりです。」

声をかけてきたのは3年生の柿谷先輩だった。

この人とは、小学校から仲がよかった。

サッカーの実力もなかなかあり、先輩の中ではうまいほうだった。

「綾部とか、姫世もいんのか？」

「あ、はい。あいつらなら後ろに並んでいますよ。」

「あっそうか！部活入んなら1年からでもレギュラー目指せよ？」

「は、はい。絶対無理ですけどね。」

「あはははっ、そうか？ま、よろしくな！」

「はい！よろしく願います。」

まあ、そんなこんなで集会が始まった。

「では、・・・サッカー部お願いします。」

キャプテンが呼ばれ、サッカー部の紹介が始まった。

「え」と・・・、サッカー部キャプテンの守谷^{もりやしゅう} 蹴^{しゅ}です。俺たちサッカー部は、日々の練・・・」

蹴先輩。桐中サッカー部キャプテン。

俺は、この人に憧れている。

尊敬できる先輩の一人である。

小学校のときに、一緒のチームの先輩だった。また一緒にサッカーができてすごく嬉しい。

俺もこの人のようにうまくなりたいと思う。

「・・・まあ、サッカー部は今度の俺ら3年の最後の総体で、県大会出場を目標に頑張っていきたいと思います。・・・以上です。」

「あ、ありがとうございました。」

サッカー部の紹介が終わった。

言いにくいが、この学校はそこまでサッカーが強くない。2年生も3年生も他の中学校のレベルにかなり劣っている。

そういうこともあり、

だから、今年の1年・・・いわゆる俺らが少し期待されている。

それに俺らは、小学校の時に市内でもそこそこ通用していたからだ。

しかし、そこまで強いわけでもない。

だから俺らも県大会になんか行けるかどうか・・・

いつにまにか部活動集会は終わっていた。

放課後・・・

部活の時間になり、1年が集められた。

「私がサッカー部顧問の、飯山だ。お前らがサッカー部の1年か？」

「はい、そうです。」

「これで全員か？」

「あ、いえ。まあ・・・」

そう、この少し前に残念なことが起きていた。

それは、

部活動集会后・・・

「おいつ、将。お前、サッカー部入んないって本当か？」

「う、うん。」

「なんでだよ!」

「決めたんだ、信也と亮太と……。」

「まさか、その2人も?」

「うん。3人でテニス部に入るつもり。」

「なんでだよ。また、一緒にサッカーやろうぜ?」

「ごめん。もう、入部届け出したから。じゃあ、またね。」

「……。」

貴重なサッカー部の3人を、俺らは失った。

「これで今のところ、サッカー部は俺を含めて6人か……どうすっかな?」

その時、京伍と綾部が知らない3人と一緒に来た。

「侑夢ー！、こいつらがサッカー部入りたいてさ。」

「本当？・・・って、こいつら」

「何？」

「何って、こいつらサッカー未経験者。」

「えゝ！！！」

他の3人も驚いた。

「って、なんで侑夢知ってんの？」

「だって、小学校一緒だった友達だし。」

「えっ！？」

「よっ、侑夢！」

「よっ・・・じゃねーよ！本当にやんのか？」

「あつたりまえ！」

「紅太も秋刀も？」

「うん！」

この3人は、小学校の友達。

1年1組の高倉 紅太
たかくら こうた

1年2組の佐藤 秋刀
さとう しゅん

1年3組の本山 能気
もとやま よしき

「聞いたぞ侑夢、サッカー部少なくてこまってるだっ？」

「まあな。」

「だから、俺らが助けてやるって言うてんだよ！俺らできるって！」

「そっか。そうだな、分かったよ。・・・よろしくな！」

「よろしく!」

「よっしゃ〜!これでサッカー部、9人揃ったな」

「そうだな」

「あ、あの〜」

「うん?」

「あの、サッカー部の1年生ですか?」

「えっ?そうだけど・・・」

「僕も、サッカー部に入りたいんだけど・・・いいかな?」

「えっと・・・悪いけどサッカーの経験は?」

「それが、ないんだけど・・・」

「そっか、じゃ俺らと一緒にか!」

と、本山が言った。

「君たちも未経験なの?」

「そう！これから始めるんだ！」

「よかった。もう、みんな入部届けは出しちゃた？」

「いや、今からみんなで出しに行くんだ！一緒に行くか？」

「うん！」

「あっお前、名前は？」

「僕の名前は、鈴木^{すずき} 剣斗^{けんと}。クラスは1年1組。よろしく。」

「よろしくな！剣斗！」

「ありがとう。」

（これでサッカー部1年は10人か・・・）

・・・このようなことがあり、今に至る。

「どうなんだ。そうなのか？」

「た、たぶん。」

「しっかり敬語を使い！」

「す、すいません。」

綾部が怒られた。

「まあ、次から気をつけろ。お前らも上下関係はしっかりな！」

「はい！」

「まゝなんともお前ら・・・少ないな・・・えゝつと、1、2、3、4・・・10人か。これじゃ1チームも組めないな。」

笑いながらそう話してきた。

（これでもけっこう揃ったほうだ・・・。）

「まあ、いい。とりあえず今日は、外周10周だ。そのあとは筋トレな。時間余ったら、グラウンドでボール拾いそれで今日は終わりだ。」

「えっ?・・・」

「え?じゃない。返事は『はい』だ!」

「あ、はい!」

全員、啞然とした。

部活に来たのにボールも蹴れない。

小学校のときとは違う、小学校と中学校の温度差にみんな言葉を失った。

・・・これが中学校の部活、・・・これが中学サッカーか。

そのころ・・・

あいつは、女子バスケ部に入っていた。

? - d r e i -

(入部して3回目の部活・・・)

「じゃあ、これから新1年の自己紹介をしてもらおうから。」

キャプテンが言った。

1年の自己紹介が始まった。

「うん・・・と、じゃあ、一番左のお前からお願い。クラスと名前、ついでにポジションもね」

「はい！えっ・・・と、1年1組の須藤 京伍です！ポ、ポジションはMFです！お願いします！」

「はい、次。」

「はい。1年2組の綾部 龍弥です。ポジションは、MFです。お願いします。」

「次！」

「えゝ、1年1組の芝山 流です。DFです。お願いします!」

なんか先輩たちは不満そうな顔だった。

「・・・じれったゝ!、おいっ!お前、他の全員紹介しろ。」

「お、俺ですか?」

「そつだよ!早くしろ!部活ができないだろゝが!」

「は、はい。えゝ・・・まず、自分は1年2組の大和 侑夢です。ポジションはFWです。こいつは同じ1年2組の・・・」

無事、全員の紹介を終えた。

(緊張したゝ、てか、なんで俺なんだよ。・・・なんか蹴先輩こわくなったなゝ)

月日は流れ・・・

それから、あっという間に1カ月が過ぎた。

で、今もいつも通りのメニューをこなしている。

「ねえ・・・今日も、ってか、いつまでこのメニューやんの？」

京伍が弱音を吐いている。

「そんなの分かんないよ。まあ、今は我慢しろよ。」

けど、弱音を吐きなくなる気持ちも分かる。

なぜなら、もうすでに1カ月以上、同じメニューなのだ。

こんなことを考えながら走っていると、

「あっ・・・」

・・・咲山だ。

あいつも、部活で走っていた。

バスケット部もそうとう走るらしい。

少しの間、見ていると目が合ったような気がした・・・

なぜかドキツとした・・・

あいつとは、中学生になった今も仲のいい友達だった。

話は変わるが・・・

小学校の時、気になっていた杉田さんは私立の中学校を受験してしまったため中学は離れてしまった。

それで全然、中学生になってから好きな人ができなかった。

だから、部活ばかりに気が寄っていた。

(恋・・・か。してみてもな・・・)

心の中で俺は叫んだ。

翌日、飯山がやってきた。

「じゃあ、そろそろ1年のメニュー変えるか」

「ほ、ホントですか!？」

「ああ・・・、じゃあ、外周10周に、筋トレいつもの5セット。それと新しく、坂ダッシュ20本な。」

ふざけている。このメニューは今までの2倍、いや、それ以上だ。聞いた瞬間、全員が下を向いた。

「お前ら、返事は？」

「は、はいっ……。」

「せ、先生！」

姫世がいきなり言葉を発した。

「なんだ？」

「そ、そのあとのメニューは……。」

「バカかお前ら、そのメニューがすぐ終わるとでも？」

「えっ？」

「それが1日で全部終わるようになったら……そうだな、じゃあ……ボール触れるメニューに変えてやるよ。ま、頑張れや。」

そう、笑いながら立ち去って行った。

「……………」

「どうすんだよ侑夢！これじゃ、みんなサッカーやる前に潰れちゃうよー！」

「そうだよ。こんなのおかしいよー！」

「どうすんだってー！」

みんなが聞いてくる。

「・・・やってやろっじゃない」

姫世が呟いた。

「えっ？」

「今からでも、そのメニューやって、終わらせればボール触れるんだろ？」

「ま、まあ・・・でも。」

「でもじゃなくて、やるしかねえーだろ！」

「姫世・・・」

「そうだよ、みんなでやろうよ！それで、早くみんなでサッカーしよう！？」

剣斗が言った。

「剣斗・・・でもお前、言いたくないけど、今までのメニューだつてろくにこなせてなかっただろ」

「そ、そうだけど・・・やるしかないんでしょ？みんなと一緒にサッカーするには」

「そうだけど。」

「そつか・・・そうだな。やんなきゃ、みんなと一緒にサッカー出来ないもんな。・・・お前らも、それでいいよな？」

「・・・うん」

「よし！いつちよやってやるか！剣斗がこう言ってるんだ、やるか！」

「うん！」

「よっしゃー！早いとこ終わらせっかー！」

「じゃあ・・・まず、外周10周からだな！」

「・・・おう！！」

しかし、

結局、その日にはすべてのメニューは終わらせることはできなかった。

けど、俺らサッカー部1年の団結力と友情は・・・また一段と深まった。

「また・・・明日頑張ろう！」

「おう！」

なんでだろう・・・。

みんな辛い練習だったはずなのに、

なぜかみんなの顔はさわやかな表情をしていた・・・

（明日も・・・やってやる！）

- - - - -

その時、

その光景をこっそり眺めている、サッカー部1年に興味を抱く者がいた・・・

「・・・サッカー部ねえ、かっこいいじゃん。」

? - v i e r -

「いてっ!・・・あっ、ごめん。」

誰かとぶつかった。

それは、女の子だった。

「あっ、だ、大丈夫?」

「あ、はい。大丈夫です!す、すいません。」

その子は、一度こっちを見た。

・・・目があった。

「あっ・・・ごめ」

「だ、大丈夫です！じゃ、また。」

「あっ、・・・。」

（ま、また・・・？）

その子は、すぐ立ち上がるとその場を走って立ち去って行った。

それは、ショートカットの背の小さい・・・たぶん1年生の女子だった。

目が合った時、ちょっとドキツとした。

（あ、あの子・・・いい匂いしたな。でも・・・見たことない顔だったな。）

「可愛かった・・・な」

思わず呟いてしまった。

数日後、

「起立！・・・礼！着席。」

中学校生活はもう・・・2ヶ月が経っていた。

俺らは、部活ばかりやってるにはいけない・・・

中学生として、勉強と部活の両立をしなければならない。

それに、そろそろ第一回目の定期テストがある。

そのころ、サッカー部の1年はテスト期間中は部活がなく、それぞれテスト勉強におわれていた。

「わぁー・・・もう！くそ！」

「なんだよ侑夢、うるせえーな！」

「だって、だって・・・テストが・・・」

「常に勉強してないからだぞ？」

「そうだけどさ・・・いいよな。姫世と綾部とヤマー（本山）は、勉強できるから・・・」

「そんなことないって、みんなちゃんとやってるからだかな？な
あ？綾部」

「えっ？ 俺！？ 俺は、家では勉強してねえーよ？」

綾部が言った。

「えっ！？マジ？」

「うん。授業で覚える。」

「その手があつたか！明日からやってみよ！」

「お前じゃ、無理だと思うな！」

ヤマが笑いながら、言ってきた。

「なんでよ！」

「絶対無理！」

「俺もそう思う」

笑って、みんなが言ってくる。

「絶対やってやる！」

そして、テスト当日。

「……………」

「なんか、侑夢元気くない？」

「あいつ、見事に撃沈だつて！」

「あはははっ、ドンマイ侑夢！」

「うるせえ……………」

すごく小さい声で言いかえしてきた。

他にも、侑夢と同じ状態にある者が…………他に3人いた。

京伍と紅太と秋刀だ。

「お前らテンション低っ！！！」

「だつて……………」

この4人は、
その日の部活、ただ、ボーっとしていた。

翌日、

「しゃーっ！！ふっかーっ！！！！今日こそ部活、ノルマ達成するぞ！」

「侑夢、朝からテンション高っ！大丈夫なのか？」

「もう、ふっきた！」

「あっ、そう（笑）」

その日の放課後・・・

「おーいつ、1年集合ー！」

キャプテンの声が聞こえた。

「はい、なんですか？」

「お前らにも、一応、報告しとこうと思ってな。」

「な、何をですか？」

「今日から、サッカー部に新たにマネージャーとして入部したいという子がさっき来たんだ。だから、言っとうちと思ってな。」

「えー？本当ですか？」

「ああ。まあ、お前らと会うのは明日以降になると思うから、会った時は、よろしくな！」「」

「あ、はい。分かりました。」

「誰だろーな・・・その子。」

綾部が呟いた。

「どうせ・・・大したことないんだろうから、期待しないほうがいいよな。」

姫世が答えた。

「そうだな。」

「はあゝ・・・。」

全員がため息をついた。

「なんか、元気の出ることないかなゝ・・・。」

「・・・。。。」

なぜか全員沈んだ。

「そんなことより・・・早く、走っちゃおうぜ!？」

姫世がその場の空気を切り替えようと言ってきた。

「そうだな、よし！走っか！」

「おう！！！」

「うん、青春だね・・・（これで、私もあいつらと一緒にのサッカ
ー部になった。頑張んなきゃ・・・）。」

そして、翌日。

部活の時間。

「１年集合！！！」

キャプテンが1年全員を集めた。

「今から、明日の総体の準備をしてくれ！」

「今からですか？」

「そうだ！」

そう、今日は3年生最後の大会の前日だった。

「わ、分かりました！」

「あ、でも、お前らだけじゃなくてマネージャーと一緒にな！」

「えっ？」

「いいから、早くサッカー部の準備室に行け！先にマネージャーは行ってるから！」

「で、でも。俺らまだマネージャーと会ってないんですよ。」

「そんなことはいいから、早く行ってやれ！一人じゃ大変だから。」

「は、はい！」

俺らは、急いで準備室に向かった。

部屋の前に着くと、中から物音がした。

「絶対、いるな。」

「うん。いるね。」

「誰が最初に入る？」

「それは、決まってるじゃん・・・」

「えっ？誰だよ！」

みんなの視線が1人だけに向いた。

それは、

・・・紅太だった。

「えっ！！やだよ」

「いいから、早くしろよ！」

「わ、分かったよ！・・・絶対、押したりすんなよ？」

「いいから、早く！」

紅太はその部屋のドアを静かに開けた。

「し、失礼します・・・」

その瞬間、姫世がおもいつきり紅太を後ろから押した。

「お、おいっ！痛ってゝなゝ．．．」

「ん？なに？」

彼女がこつちを振り向いた。その瞬間．．．みんなが固まった。

「お前ら、押すとかマジないぜゝ．．．ん？どうした？」

そして、紅太も彼女を見た瞬間に固まった。

「か、可愛い．．．」

全員が声をそろえて言った。

（可愛いなあ．．．ん？あ、あれ？）

「・・・ああ~~~~!!」

「な、なんだよ侑夢！うるせえだろ！」

「ち、違うんだよ。この子、この前の・・・」

「・・・うん。この前はごめんなさい。・・・ゆ、侑夢くんだよね。」

「えっ？『侑夢くん』って？」

「や、やっぱり・・・この前の子、って、な、なんで名前知ってんの！？」

「ゆ、侑夢・・・知り合いなのか？」

「いや、知り合いっ・・・てか、この前ぶつかっちゃって。その時

は、まだマネージャーだって知らなかったから。」

「そうだったね。それに、あたし、他のみんなのことも知ってるよ？」

「えっ？なんで？」

「改めて・・・はじめまして。今週なつねから、あなた達、サッカー部のマネージャーになった、1年2組れい夏音レイです。・・・これから、よろしくね。」

? - f u n f -

「よろしくね！桐中サッカー部の1年のみんな。あたしは夏音レイ。．．．あたしのは、レイって呼んでね。」

(か、可愛い．．．)

「う、うん。よろしくな。レイ．．．さん？」

「だーから！レイでいいって！」

「わ、分かったよ。レイ．．．」

「うん。それでよし！」

みんな、レイのことを歓迎した。

それに．．．レイは可愛かった。

「あつ、レイ。さっき、みんなのこと知ってるって言ってたけど本当なのか？」

「うん！本当だよ！」

「サッカー部全員ってこと？」

「ううん。あたしが興味あるのは、サッカー部の1年だけだから。だから、1年しか分かんないの」

「じゃあ、俺らは全員知ってんのか？」

「うん！知ってるよ！……侑夢でしょ？綾部くん、葵様、紅太、もっくん、秋ちゃん、京くん、流さん、剣斗くん、聖夜くんでしょ？」

「そうだけど……ちょ、ちょっと待て！いきなりあだ名つけちゃってんのもおかしいけど……なんで、姫世だけ『様』なんだよ！」

「だつて……姫世くんてそういうキャラじゃない?」

「あんな、レイ?……俺は普通に『葵』でいいから。『様』つけてくれたのは嬉しいけどごめんな?これからもよろしくな。」

「ふん……うん!じゃあ、『葵くん』ねっ!?」

「うん!それなら、いいよ。」

「なんか、レイ……姫世だけ特別な気がするんだけど。気のせいかな?」

「いや、気のせいじゃないだろ。絶対に好きだろ……あの感じじゃ。」

「おいっ!お前ら!なに喋ってんだ!早く準備、終わらせっぞ!?」

姫世が仕切ってきた。

「うるせえーよ！バーカ！お前なんか、俺らの敵だかなー・・・」

「いいから、早く終わらせよーよー」

剣斗が呆れて言ってきた。

その瞬間、みんなが剣斗を見て・・・

「うるせえー！！！！」

姫世以外の全員が声を揃えて言った。

「す、すいませ〜ん・・・」

その後も、姫世とレイは2人で仲良く準備をしていた。

それを、睨みながら他の奴らは2人を見ていた。

「あいつら、お似合いだな〜・・・」

（しかし、・・・実は、レイの本当の目的は姫世ではなかった。）

準備も無事終わり、総体当日になった。

3年生、最後の大会は大雨だった。

一人一人が、チームのために闘う3年生の姿を1年全員は目に焼きつけて、応援しながら試合を見ていた。

しかし、全力の応援もむなしく、結果は『負け』というものがついてきてしまった・・・が、3年生は悔いの残らない試合をし、試合後もさっぱりとした顔をしていた。

最後に・・・

キャプテンの蹴先輩から後輩へ言葉を頂き、

先生が3年生に言葉を送り、

後輩を代表して2年の新キャプテンが感謝の言葉を送り、

そして、

3年生、中学校3年間の部活動が終了した。

「・・・お疲れ様でした！ありがとうございました。」

「お前らはこれから頑張れよ？」

「うすッ!」

そして、月日が経ち・・・

次は俺ら、1年の大会『ジュニア杯』が近づいてきていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6193i/>

瞬間。 - setsuna -

2010年11月6日22時32分発行